

烏丸六条で暮した頃―東本願寺周辺

昭和二十四年十月に、熊本、福岡を経て私の家族は京都にひっこして来た。私は三歳で、妹は生まれて二か月の乳呑児ちのみごだった。中国からの引揚者であった父がやっとありついた就職先の会社が倒産。ひどい貧乏暮しだった。

間借りした家は、東本願寺のすぐ近くだったから、東本願寺は毎日見ていたことになる。東本願寺の前には、大きな銅製の蓮はすの花をかたどった噴水があるが、これを見るたびに胸の底を灼やかれるようなかなしいなつかしい気持ちになる。

やっと間借りした家、それは二階の二部屋だったが、家主が毎日追いたてにやって来る。脅おどかさされ、嫌味を言われるのがたまらなくなつた母は、妹と私をつれて、東本願寺に逃げようのように遊びに行っていた。緑青の灰いろがかった深みどりいろの蓮の花びらの噴水。そ

わたしの京都

河野裕子

れらは一枚一枚大きくくつきりとした丸味を帯びつつ、幾重にも重なっている。静かな大きな噴水で、傍そばに居るだけでころろが落ちつく。この噴水の下で、母と妹と私はお弁当を食べ、鳩はとを眺めていた。本願寺の裏の木立や空地に居ることもあった。ひんやりと静まりかえっていて、木の蔭かげが水の底のようだった。暮しは、母の内職にかかっている、母は封筒貼はりや風呂敷縫いなどの内職をしていた。風呂敷一枚を縫って七十銭だったという。

紙芝居の五円をねだりいし裕子階段に眠れり四歳なりき

河野君江「七滝」

紙芝居の五円のために、母が何枚の風呂敷を縫わなければならぬか、ミシンを何百回踏まなければならぬか、そんなことは私にはわからなかった。聞き分けのいい妹とちが

って、私は言い出したらきかない。どんなに叱しかられても、紙芝居に行きたかったし、スケートも、三輪車も欲しかった。「封筒貼りて二人子に買いし浴衣なり黄ばみて小さしまだ残しもつ」という歌も母にはある。

当時の東本願寺周辺には、まだ空地が多く、畑もあり、家並は低く、風景が広く静かだった。その広い風景の中を、市電がゆつくりと走っていた。京都駅前には戦時中は芋畑いもばただったと聞いたことがあるが、それはほんとうだろうと思う。京都駅まで歩いて十五分くらいの距離の所に、私たちが住んでいる家があった。私が五歳頃の真冬、京都駅が火事になった。当時の京都駅は、横長の形をしていたが、まっ暗な夜空の下に燃えあがる横長の炎の色と形をはっきりと私は記憶している。その記憶は一枚の絵であって、音も動きもなく、ただ

くつきりと黒と赤が灼きついている。

先日、東本願寺をたずね、その足で烏丸六条の、あの間借り暮らしをしていた家をさがしに行ってみた。あたりは雑然とビルが建てこんでいたが、当時の家とその右隣りの二軒は残っていた。三軒とも空家になり、真昼の亡霊のように、ガランと黒ずんで、その一角だけが奇妙に、あたりの景から浮きあがっていた。

ガラス窓からのぞいて見ると、暗い土間の奥に、黒い階段の一部が見えた。あの階段で紙芝居の五円欲しさに泣き、泣いたまま眠ってしまったのだと思った。

二階の窓を見あげた。すすけたように曇り、何も映さなくなった窓。あの窓の奥の二間に私たちの暮しがあった。考えてみると、戦後まだ四年目、日本人誰もが貧しい時代だった。

あの窓の前に、母が踏み続けていた蛇の目ミシンが置かれていた。

もの凄い台風の日、父が狂ったように押えていたのもあの窓である。開襟シャツを着た父は、母を叱りつけながら必死で窓を押えていた。今から考えると、あれは昭和二十五年に来たジェーン台風だったのだろう。あの頃は、アメリカの真似をして、カスリン台風とかダイナ台風という女性名の台風が多かった。台風が来ると、どの家も窓に板を打ちつけて備えていたが、そんなようすも今は見なくなつた。

あたりを見まわすと、家の前には、的場桐材店という看板をあげた材木屋があり、太い材木が積みあげてある。その材木屋は、五十年前もたしかにあった。その頃の材木置場のまわりには空地があり、子供たちが群がり遊

んでいた。取り残しの畑菜に、淡い黄色の花が揺れ、ペンペン草も、れんげ草も咲いていた。夕ぐれ、どこかのお店屋さんにお使いに行き、道に迷って佇ちつくしていたのは、どの辺りなのだろう。あの時の不安はまだ心の中にあるのに、人も風景も変わってしまった。

私の額には、今も消えない小さな傷あとがある。それは、この家にひっこしてすぐ、近所の男の子たちと、この材木置場の材木の上で取っ組みあいのケンカをして、ひっかかれた傷あとである。陽にやけて、黒いくるんとした顔の、声のすこし嘎れた私は、京都の男の子たちにひとりで向かっていった。向こう意気のつよい、寡黙な女の子だったと思う。

(かわの・ゆうこ「塔」選者)